

わたし、先生になる！～鯖江女子師範学校での学び～

教育博物館

西川真代

福井大学附属図書館より、「鯖江女師生を中心とする社会変遷双六図」等 62 点の掛図が寄贈されたことにより、令和3年度特別展「わたし、先生になる！～鯖江女子師範学校での学び～」を開催した。

本稿では、鯖江女子師範学校および構成した展示資料の紹介、特別展を通しての省察をまとめる。

〈キーワード〉 鯖江女子師範学校 福井師範学校 女子教育 教員養成

I はじめに

令和2年に福井大学附属図書館で、水彩画の鮮やかな色彩と柔らかな筆致で女性教員の一生を描いた双六の掛図が見つかった。それは、かつて福井県にあった「鯖江女子師範学校」での授業のために、当時の教員が作成したものであった。

鯖江女子師範学校は、1928（昭和3）年に現在の鯖江高等学校が建つ場所に作られた。戦後、1949（昭和24）年に福井大学学芸学部が発足したため、1951（昭和26）年に最後の卒業生を送り出し、閉校した。それから70年を経た現在、師範学校における教員養成の学びを知る機会はほとんどなくなり、「師範学校」そのものを知らない世代が増えた。

今回の特別展では、学級日記や写真などの貴重な資料を通して、鯖江女子師範学校での学びや生活を紹介したいと考えた。師範学校を知る方が当時に思いを馳せたり、師範学校を知らずとも、現在教員を目指す学生をはじめとした若い世代が、当時の学生も変わる事のない熱意や思いを持っていたことを知ったりする機会となることを期待して、展示を構成した。



図1 校舎写真1940（昭和15）年



図2 農業実習1933（昭和8）年

II 特別展の概要

1 **テーマ** 「わたし、先生になる！～鯖江女子師範学校での学び～」

2 **期間** 令和3年10月9日（土）～12月12日（日）

3 **展示内容および展示資料**

展示内容は、学校生活で身近なわかりやすいものを取り上げ、当手を想像しやすい物語性のあるものとなるように心がけた。また、展示資料は、福井大学附属図書館から寄贈された掛図、福井大学福応会と福井県立鯖江高等学校からの借用物が中心である。

(1) 師範学校の概要

鯖江女子師範学校について展示するにあたり、まず「師範学校」とはどのようなものなのか、ということの説明が必要と考えた。そこで、特別展の展示の序盤では、師範学校の概要について扱った。

① 師範学校について

師範学校とは、明治期から終戦後にかけて存在した、おもに、初等教育（小学校）の教員養成を目的とした学校である。

1872（明治5）年に東京に官立（現在の国立）の師範学校が創設され、その後、次第に各府県に公立師範学校が設置されていった。

1886（明治19）年には、師範学校令の公布により、教員として順良・信愛・威重の気質を備えることが要請され、寄宿舎制をとるといふ、厳格な師範教育の基礎が確立された。

1943（昭和18）年には、各府県の師範学校は3年制の官立の学校に昇格した。第二次世界大戦後には、学制改革により廃止され、1949（昭和24）年以降に発足した大学の学芸学部や教育学部の母体となった。

師範学校の入学資格は、高等小学校または中等教育（旧制中学校や高等女学校等）修了者であった。高等小学校卒業者は4年制（のちに5年）の第一部に14歳で入学した。中等教育修了者は1年制（のちに2年）の第二部に入学した。展示解説時には、鯖江女子師範学校の生徒達が高等小学校卒業者は14歳で、高等女学校卒業者は17歳で入学すると説明した。

師範学校の学費は公費で負担されていた。授業料がかからないため、優秀だが経済的に進学が難しい家の子どもに、学ぶ機会を与える役割も果たしていた。19歳の卒業時には、卒業証書と教員免許状に加え、辞令が渡された。師範学校の生徒は、卒業後20歳になる年に教職に就くことが義務とされていた。

② 福井県の師範学校の変遷

福井県の教員を養成する学校は、1943（昭和18）年に鯖江女子師範学校が男子部と統合して官立福井師範学校女子部となるまで、何度も名称が変わってきた。特に、明治9～14年には、福井県の嶺北が石川県に、嶺南が滋賀県に統合されていた時期であったため、師範学校の変遷が複雑であった。

鯖江女子師範学校が設立するまでは、福井県師範学校女子部があったことや、昭和18年に統合して官立福井師範学校女子部になったことは、鯖江女子師範学校を知る上で重要であると考えられる。そこで、図3のように設置年と学校名を矢印でつなぎ、福井県の師範学校の変遷を視覚的にわかりやすく示した。

(2) 鯖江女子師範学校の概要

① 女性教育と女性教員

「家に不学の人なからしめん」とうた

った明治政府は、女子教育にも力を入れようとしていた。1876（明治9）年の敦賀県教育規則の中の男女教授法区別では、男女で学校を分けることが望ましいとされた。また、12歳以上の女子には、裁縫科・修身学・健全学が設けられ、修身では「貞婦・孝女」が教えられた。そこで、女性教員が必要とされた。

女性の教員養成の制度はまだまだ整っておらず、学制が公布された1872（明治5）年には、福井県の女性教員は4人だけであった。福井県で最初の女性教員養成の学校は、1877（明治10）年に開設した石川県第三女子師範学校であった。しかし、1881（明治14）年に廃校となり、1906（明治39）年に至るまで、女子部は設置と廃止が繰り返された。

1911（明治44）年には県内の女性教員の割合は約3割まで増加した。当時の女性教員の待遇は、男性よりもはるかに低いものであったが、かつては女性に不要とされた学問を修め、教育に携わる、新しい女性の職場が確立されたのであった。

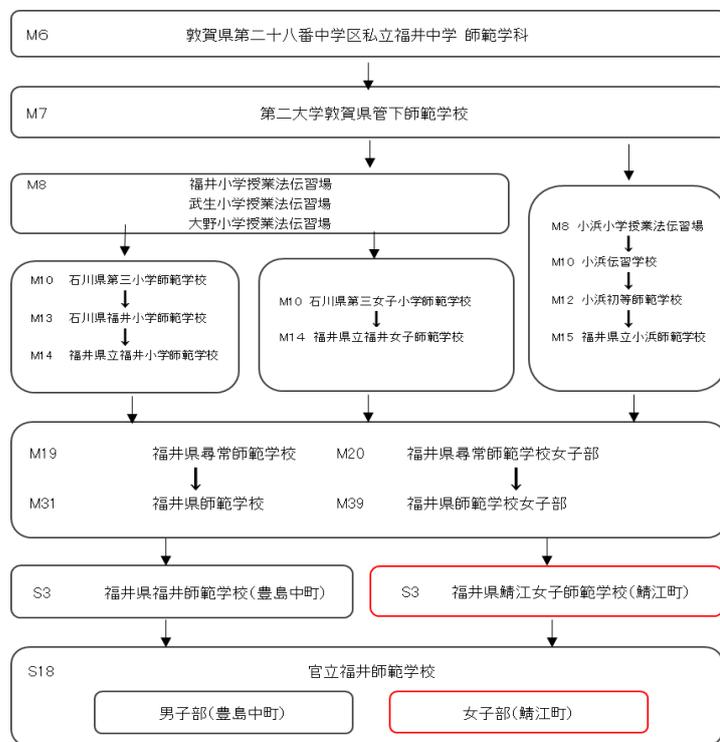


図3 変遷図

女子師範学校をテーマとして扱う上で、それまでの女性教育と女性教員のあり方について展示説明した

② 鯖江女子師範学校の誕生

1919（大正8）年に焼失した福井県師範学校の再建問題に関連して、女子師範学校の創立が議論にのぼった。今立郡鯖江町（現在の鯖江市）から師範学校の誘致について土地提供の申し出もあり、師範学校女子部を分離して、鯖江町に女子師範学校が創立されることとなった。

こうして、1928（昭和3）年、鯖江女子師範学校が新設された。1900年代以降、日本の師範学校の数は、増加傾向にあった。1897（明治30）年の訓令によって各府県は女子師範学校を分離独立させるようになったからである。新設にともない、鯖江高等女学校も併設された。

③ 開校当時の様子

鯖江女子師範学校の開校にともない、男子部との分離式が昭和3年4月8日に行われた。分離式では、金属でできた記念のしおりが配られた（図4）。

翌9日に、職員15名、師範生徒279名（10学級）、高女生徒90名（2学級）で鯖江女子師範学校・鯖江高等女学校が開校し、第1回の入学式も同日に挙行された。

しかし、建物は本館と講堂しか完成しておらず、校舎内は工事のため床も廊下も粘土だらけの上、教員数も足りなかったため授業ができなかった。10日の始業式後はすぐに全校生徒で村国山へ遠足に行き、11日からは校舎の粘土をぬぐう大掃除と、校庭の除草が始められた。13日からは教員も19名に増え、ようやく授業が開始されたが、器具も標本も参考書もないという学習環境であった。開校後も工事は続き、霜の降るときまで井戸掘り等の音が学びの妨げになった。しかし、こうした環境の中でも、生徒たちは熱心に学びに向かっていた。



図4 分離記念のしおり

④ 制服

制服は、その時代を示す学校文化の一つであると考えられる。そのため、写真を含めてパネル展示をした（図5）。鯖江女子師範学校の制服は、資料の写真から、福井県師範学校時代から着用していたもの、鯖江女子師範学校開校後のもの、戦時下のものと、少なくとも3種類は存在したことがわかった。



図5 制服1930（昭和5）年

⑤ 校章

校章は、昭和3年11月9日に制定された。夏期休暇中の課題として、全校生徒より校章の図案を募集した結果、一部2年の笠松花枝氏の作品が入選して、校章に採用された。

『福井県師範学校史』には、「青紫色の七宝焼きで、縁取り、線の部分及び裏は銀で、星は白色、星のあるまわりの部分は緑色で校章として有色は珍らしく異彩を放っていた」とその色について詳しく書かれていた。

校友会誌「みどり」第9号には、「雪輪は雪国としての郷土と共に、蛍雪の功を、星は高き理想の憧憬、その二つ並ぶのは和悦相協ふを、心臓型はその中の文字の色さながら赤きまごころを表象する。即ち雪より浄き操を持し、星より高き理想を胸に抱きつゝ至誠一生を貫くの意気を示すものである。」⁽¹⁾と書かれていた。

鯖江女子師範学校の校章は、制服に付けていたもの（図6）だけでなく、出版物の著作欄の印、校旗、『校訓』の表紙等のさまざまな所に使われていた。学校の象徴である校章について、当時使われていた実物を展示



図6 校章

した。また、3 cmほどの小さい物であるため、見やすいように写真を拡大して配置した。

⑥ 校歌

鯖江女子師範学校・鯖江高等女学校の校歌は、以下のものである。

- 一、朝に仰ぐ 日野山の 高きを永遠の のぞみにて
道を己に 求めつつ 登れよとこそ
暁の鐘鳴る 暁の鐘鳴る
- 二、夕に望む 日野川や 流れも絶えぬ 水上は
谷間谷間の 滴にて 豊けき水に
幸の笑湧く 幸の笑湧く
- 三、上野ヶ原の 明暮れに 身内の塵も 払いつつ
心の鏡 磨く時 生命新に
幸の花咲く 幸の花咲く



図7 『福井県立鯖江高等学校
創立百周年記念誌』（福井県立鯖
江高等学校）より 平成26年

「朝に仰ぐ日野山の」と始まるとおり、鯖江女子師範学校の東側に日野山が位置していた。寄宿舎生活を送る生徒たちは、日野山から昇る朝日で一日を迎えたと推測される。さらに、「日野川」「上野ヶ原」と、歌詞には郷土の地名が詠み込まれている。

また、「幸の笑湧く」、「幸の花咲く」という華やかで明るい歌詞からは、女子師範学校生への前向きな学びへの期待がうかがえる。

校歌は、学校を象徴するものであり、その特色を映し出していると考えられる。特別展では、歌詞と、『創立百周年記念誌』掲載の楽譜（図7）をパネルにして展示した。卒業して時間が経っていても、メロディーを覚えている来館者は多い。展示期間の途中からは、福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程の合唱部の協力により、歌詞が入った校歌を特別展会場で流すことができた。今回の展示の成果で、常設展示である校歌検索システムに、鯖江女子師範学校・鯖江高等女学校の校舎写真および歌唱を追加することができた。

⑦ 校訓

1935（昭和10）年2月、当時の長崎惣一校長をはじめ、教諭たちが約2年間苦心を重ねて五箇条の校訓と解説を作りあげ、2月11日の紀元節に発刊された。五箇条の校訓は以下の内容である。

- 一、忠孝を旨とし至誠一生を貫く。
- 一、貞淑を旨とし勤労百事に当る。
- 一、敬愛を旨とし和悦上下を協う。
- 一、進取を旨とし研究創造に従う。
- 一、即事を旨とし錬体健康に努む。

この校訓について、解説付きの和綴りの書物（図8）も作られた。全校生徒は月曜の朝礼に校訓を唱和し、月1回は担任の先生から解説の講義を受けた。全校をあげて校訓を中心とし、学びの道を進めたのであった。

特別展の準備の中で、『校訓』を入手することができたため、実物を展示した。表紙には鯖江女子師範学校と鯖江高等女学校の校章が描かれている。



図8 『校訓』
1935（昭和10）年

⑧ 生徒数の移り変わり

女子師範学校の生徒数の変遷を展示した。第二部（高等女学校卒）があるときは、一学年80～90人ほどで構成されていたようである。昭和18～20年頃は、戦争による教員不足を補うためか、入学生が多くなっている。

⑨ 運動場図、校内図

資料を探す中で『本校運動場図』（『我が校の体育』福井県鯖江女子師範学校編 昭和12年 国立国会図書館デジタルコレクションより）と『校舎及寄宿舎建物配置平面図』（『創立五十周年記念刊行 同窓会誌』福井県立鯖江高等学校同窓会 昭和44年より）を発見したため、それぞれパネルにして展示した。（図9、10）展示は、机上に並べ上から覗くようにして図を眺めることができるように配置した。

また、各図の上には、5cm×10cmほどの大きさの写真を数点配置した。例えば、農園の近くには農作業の様子の写真を、食堂の近くには食堂での集会の様子の写真を、という配置である。図と写真を結びつけ、当時の学校生活を思い起こしやすいようにした。来館者の中には、「校内図を見て、当時自分が住んでいた部屋を思い出した」という方もいた。

『本校運動場図』の中には、「教生道路」という文字が見られる。当時、その道を通って生徒達は附属借陰小学校へ教育実習に行った。教育実習生の生徒は「教生先生」と呼ばれ、通ってくる道は「教生道路」と呼ばれた。「附属小学校」の説明パネルを近くに配置し、関連づけて説明ができるようにした。

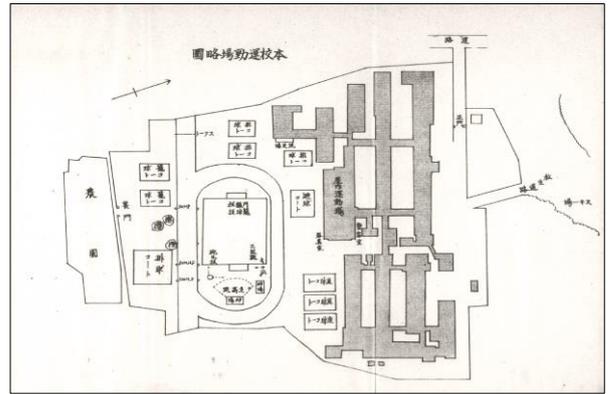


図9 本校運動場図

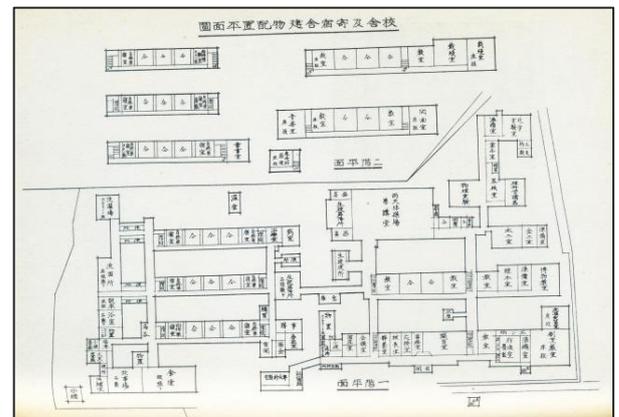


図10 校舎及寄宿舎建物配置平面図

(3) 鯖江女子師範学校での学び

① 入試問題

当時の入試問題は、国語（講読）科、作文科、算術科、国史科、地理科、理科で構成されていた。鯖江女子師範学校の入試問題は、国立国会図書館デジタルアーカイブに所蔵されていたため、その内容をパネルにして展示した。また、福井県に関わる問題も含まれていたため、一題を取り上げて展示した。

② 師範学校で学んだ教科

1907（明治40）年、師範学校規程に基づいて、学科課程が定められた。本科第一部では男子生徒には法制と経済が新たに加わった。手工を男女に必修とし、英語を男子生徒には必設、女子生徒には加設としていずれも随意科目とするなどの改革を行なった。

1910（明治43）年「師範学校教授要目」を制定し、各教科の内容を詳細に規定した。これには、修身・教育・国語と漢文・英語・歴史・地理・数学・博物・物理と化学・法制と経済・習字・画・手工・音楽・家事・裁縫・農業・商業について学年ごとの教授時数と内容があげられている。

各師範学校においてはこの要目に準拠し、地方の状況に応じて教授細目を定めることとした。

展示に当たり、『我が校ノ教育』（福井大学附属図書館所蔵）に、鯖江女子師範学校の学習課程が記載されていたため、パネル化して展示した。学習課程は、第1～5学年で、系統性をもった授業内容が組まれていた。例えば、「地理」では、第1学年では「日本地理」、第2学年では「外国地理」、第3学年では「外国地理、地理概説」、第4学年では「地理概説、教授法」、第5学年では「地方研究、教材の研究」となっていた。

③ 郷土教育、郷土研究

郷土教育とは、郷土への愛着と理解を重視し、郷土に具体的な教材を求めて行うものである。昭和4年からの世界恐慌の影響により、日本の農村の窮乏化は深刻であった。大正時代に広がった自由教育運動も行き詰まった結果、新しい教育運動として「郷土教育」が登場した。郷土学習を含めた実学教育で不安定な国勢を立て直そうとしたのである。あわせて愛郷心の育成にも力が注がれた。

文部省は昭和5,6年度に、全国の師範学校に対して郷土研究施設費を総額約60万円、1校あたり約5千円を補助し、教育の実際化郷土化に努めた。各師範学校では、補助金を使用して郷土室を整備した。

郷土教育の推進の流れによって、各師範学校では、郷土研究室が設けられ、郷土研究が盛んに行われていた。

1928(昭和3)年に開校した鯖江女子師範学校では、学校の整備があったため、他校より3,4年遅れながらも、郷土研究を実施していった。

郷土室も設けられ、郷土研究部を中心に研究が進められた。郷土室は、郷土に関する知識を得て各教科の学びの助けとすること、また純真な郷土意識・郷土愛を拓き養うことを目指すことが設置目的とされた。

郷土室は2室設けられ、室内には研究資料や県地図などの研究物が陳列された(図11,12)。職員と生徒は自由に出入りし、研究することができた。

福井大学附属図書館から寄贈された掛図資料の中には、展示した『農産関係図』のように、生徒たちの制作物もあった。このような制作物について『我が校の郷土教育』に記録が残っており、この郷土研究に関連して制作されたと考えられる。

ア：出版物

鯖江女子師範学校の郷土研究は、出版物に名前が代表して書かれていることから、当時の教員である河合千秋訓導が中心となって行っていたと考えられる。研究の成果として、1936(昭和11)年には『福井県の伝説』、『我が校の郷土教育』が出版された。(図13)展示では、所蔵する以下の鯖江女子師範学校の出版物を展示した。

a：『福井県の伝説』

この書籍では、郷土研究部によって調査された、福井県内の各地域の伝説について書かれている。

b：『我が校の郷土教育』

この書籍では、郷土研究部によって調査された、福井県内の郷土にまつわる情報が書かれている。特に注目したいのが、各教科における郷土教育の方法について記載されている点である。

c：『郷土に即せる裁縫学習帳』

師範学校では、小学校向けに、学習用教材の出版も行っていったようである。展示したのは、尋常科4~6年、高等科1年用の教科書である。著作は、福井県鯖江女子師範学校裁縫研究会であった。

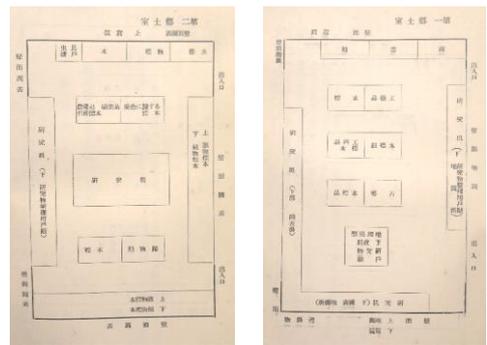


図11 郷土室 『我が校の郷土教育』
(1936(昭和11)年)より



図12 立体地図とともに1936(昭和11)年



図13 『我が校の郷土教育』
1936(昭和11)年より

イ：掛図

今回の特別展では、福井大学附属図書館より寄贈された「鯖江女師生を中心とする社会変遷双六図 公民科郷土化として」(図14)を展示の中心とした。これは、当時の教員が授業のために作ったものである。掛図下部の備考には、以下のように書かれている。

「生徒自体ノ現実ノ社会ヲ注視セシムル一助トシテ本図ヲ作製セリ。本図ヲ目シテ子供ダマシ的ノモノ漫画的ノモノトナス勿レ、本図ハ幾多ノ学術ニ立脚シタル公民的教材ヲ含ムコトヲ心アル士ハ看取スルナラン。本図以外ニモ勿論幾多ノ社会会例ヘバ政治的・経済的・宗教的・学術的・職業的・修養的・娯乐的ノモノヲ有スルナランモソレハ個的特殊ノモノナレバ煩雑ヲ恐レテ省略セリ。本図ニヨリ幾分ナリトモ社会ノ本質ヲ理解シ得ルナラバ作製者ハ望外ノ教育的満足ヲ有スルナルベシ。」

ここでは、「生徒自身の現実の社会を注意してみさせる助けとして作製した」こと、「子どもだましな漫画的なものとみなさないでほしい」こと、「多くの学術をよりどころとして公民的教材を含むものであり、双六を通して少し

でも社会の本質を理解してほしい」ことが述べられている。

また、掛図の内容を見ると、女子師範生に対する期待がうかがえる。

生徒たちは、高等小学校または高等女学校を卒業してから入学してくる。そして、入学すると、学級会、寄宿舎、室員、校友会「みどり会」の一員となる。

卒業すると、同窓生となり、同時に教員としての一步を踏み出す。そして、勤務校の一員、教育社会の一員のように、教員としての職業上における立場も書かれている。また、教員としてだけでなく、夫婦社会といった家庭社会、市町村社会といった地域社会、国家中心の国際社会の一員となることまで描かれている。最後に黄泉の客まで書かれているところに作者のユーモアが見て取れる。

家庭や勤務校だけにとどまらず、国際社会に至るまでの広い世界での活躍が女子師範生に期待されていたことが、この双六掛図からは読み取れる。師範学校で学んだということは高学歴の女性であるということをも自負して生きてほしいという願いも込められていたのかも知れない。

特別展に当たり、双六掛図を展示の中心に据えるため、横置きするのではなく壁に掛けた展示方法を考えた。約90年前の制作物であるにもかかわらず、巻いて保管されていたためか、絵の部分はきれいなままであった。一方、周りの部分や軸棒周辺は傷みが激しく、壁に掛けると破損する恐れがあった。そこで、修復をした上で展示をした。他の掛図資料は、破損しないように、掛け軸用のケースを横置きして並べ、アクリルカバーによって保護した。

また、展示室の間取りを、展示室の奥に進むことで展示の全貌や双六掛図全体が見えるようにしたいと考えた。そこで、展示室内にL字型の壁を配置した。



図14 「鯖江女師生を中心とする社会変遷双六図 公民科郷土化として」1931(昭和6)年頃

④ 学校看護婦養成科

1938（昭和13）年には、女子師範学校の生徒に学校衛生の知識を兼修させるために、学校看護婦養成科が設置された。2年間にわたって、毎週4時間ずつ、赤十字病院医師の出張指導を受けることになった。

卒業後は、単なる小学校教員としてだけでなく、学校看護婦としての活躍も期待されたのである。学校看護婦が県内の学校に十分に配置されていなかった当時は、大きな役割を果たしていた。

実習は、8月1日から10日まで日赤福井病院で行った。傷病将兵の世話などをして、看護の知識技能を体得した。

⑤ 学校行事

鯖江女子師範学校では、さまざまな学校行事が設けられていた。展示では、現在と変わらない生徒たちの学ぶ姿を見せたいと考えた。そこで、文章に記録があり、写真も残っている水泳訓練（図15）と白山登山（図16）を取り上げて展示した。

ア：水泳訓練

鯖江女子師範学校では、毎年7月中旬ごろから10日間ほど久々子海岸（現在の美浜町）で水泳訓練を行っていた。

2年生のみ2日早く出発し、貝や海藻の採集を行った。朝の地引き網見学や、夜の舟上からの夜光虫見学も行われた。50メートル先の飛び込み台まで好きな泳法で往復できる5級から、遠泳に合格し、潜水ほかすべての泳法の距離が長い1級まで分けられ、最終日には2キロほど遠泳を行った。みな上達し、真っ黒に日に焼けていた。夜にはハーモニカ、トランプ、ゲーム、合唱、談笑と、楽しく過ごし、12～3人が一つの蚊帳の中で眠った。

イ：白山登山

7月には第1部5年生と第2部2年生（いずれも最高学年）が、白山登山を行った。

1日目は、笠、ござ、わらじに脚絆、こて、八角の金剛杖という装備で、早朝より勝山まで電車で移動し、北谷まで2里を登り、谷峠を越えて白峰村で一泊した。2日目は手取川の谷に沿って、でこぼこ道を3里歩いて湯本の旅館で一泊した。3日目は、室堂までたどりつき、薄暗い狭い小屋で一夜を明かした。4日目は暗い中出発し、険しい道を経て登頂し、ご来光を拝んだ。頂上の白山比咩神社に参拝して湯本の旅館に引き返して泊まり、5日目の午後、帰福し、解散した。

⑥ 教育実習

現在の福井大学の教育学部に附属義務教育学校が設置されているように、鯖江女子師範学校にも、附属小学校があった。現在の鯖江市惜陰小学校で、1928（昭和3）年7月より、代用附属小学校となった。

教育実習も行われた（図17）。1943（昭和18）年の『教育実習規定』では、教育見習い1週間、基本実習8週間、地方実習2週間、総合実習1週間、保育実習2週間の計14週間（約3ヶ月半）で設定されていた。

惜陰小学校と女子師範とは王山西側中腹の細い教生道路と呼ばれた道で結ばれていた。惜陰の子どもたちは実習に来る師範の実習生を「教生先生」と呼んでいたそう

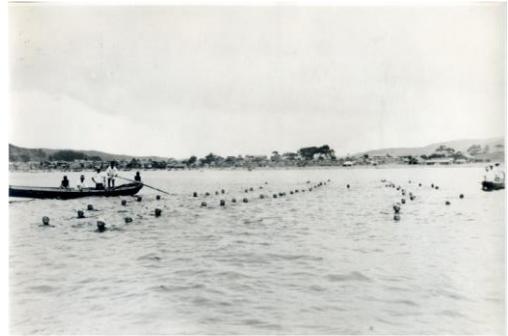


図15 水泳訓練 1930（昭和5）年



図16 白山登山 1932（昭和7）年



図17 惜陰小学校にて 1942（昭和17）年

である。

その後、惜陰小学校は附属小学校ではなくなった。しかし、1973（昭和 48）年に作られた教育研究室進徳館には、当時の膨大な教育資料や研究資料が大切に保管されている。

特別展では、『教育実習規定』（1943（昭和 18）年）と『参観の栞』（1943（昭和 18）年、四ヶ浦国民学校）を、関連する展示物として配置した。

(4) 寄宿舍の概要

師範学校は、寄宿舍制がとられていた。鯖江女子師範学校でも、寄宿舍が設けられ生徒たちが生活を送っていた。（図 18）

特別展では、師範学校の大きな特徴と考え、展示内容に含めた。

① 寄宿舍でのくらし

師範学校の寄宿舍は、大きな教育的意味をもつ、精神的訓練の場と考えられていた。

寄宿舍の朝は早く、4～9月には5時に起床し、6時に朝食で、10～3月には5時半に起床し、6時半に朝食であった。一室は8人ほどで各学年が混ざり、5年生が室長となった。舎監長を除く4人の女性教諭が舎監として交代で宿直をし、生徒と朝夕食をともにし、朝晩2回の点呼を行った。登校前1時間と就寝前2時間の自習時間があり、人格を高めるための規律正しく厳しい生活であったが、将来の教育者を目指して、みな努力をした。

外出は、曜日に関係なく個人でもでき、休日には自宅での外泊も許可されていた。しかし、手紙は舎監によって検閲された。

② 寄宿舍での行事

寄宿舍での生活は、「格子なき牢獄」と呼ぶ者もいるほど、女生徒たちにとっては厳しいものであったが、そのような暮らしの中でも、楽しい行事が設けられていた。

5月中旬には、3年生中心に、新入生歓迎会と修学旅行慰労会を行った。新入生の入舎を祝するとともに、4、5年生において隔年で実施される関東・東北地方2週間、関西・四国地方1週間の旅行を終えた慰労と帰校を祝ったものである。

学期はじめには部屋替えがあり、そのたびに舎監の許可を得て部屋ごとに「お部屋会」を行った。会ではお菓子や果物、チョコレートを食べて楽しんだようである。

卒業式前日の送別会では、校章入りの菓子折をつけて会食し、「ほたるの光」を歌った。

戦時下になると、誕生会、生活刷新のための意見交換をする常会、慰問袋の作成・発送、大根干しのような行事が新しく行われていた。

厳しい「精神的訓練の場」である寄宿舍生活であるが、その一方で寄宿舍と思われる場での生徒たちの笑顔の写真も残っており、楽しい場でもあったことがうかがえる。（図 19）



図 18 寄宿舍にて 1933（昭和 8）年



図 19 笑顔で歓談 1933（昭和 8）年

③ 寄宿舎での食生活

食事の内容を示すことで、当時の暮らしを想像しやすくなると考えた。寄宿舎での食事の内容が、出版物『我校の体育』（1937（昭和 12）年）に残されていたため、表にして展示した。

主食は基本的に麦と米を混ぜた麦飯であった。朝食は麦飯と味噌汁と香の物（漬け物）、昼食と夕食には、主に主菜として魚や野菜の煮付けが出た。たまに出るカツレツやコロッケ、ライスカレーのような洋食に、生徒たちは喜んだのではないかと考えられる。

寄宿舎での食生活は、記録を見ると質素なものであった。しかし、毎日の摂取カロリーは 2400 キロカロリーを超える十分なものであったようだ。要因として、毎食の麦飯の量が 1 人 1 合だったことがあげられる。副食の多い現在の食事と違って、栄養素を主食で補っていたようである。

(5) 戦時中から戦後の閉校まで

鯖江女子師範学校の晩年は太平洋戦争期と重なっている。官立福井師範学校となったのも戦時中の昭和 18 年である。戦後は新制福井大学が発足し、「師範学校」そのものがなくなる。そこで、太平洋戦争期から閉校までについて、主な出来事を挙げながら展示した。また、新制福井大学、跡地に立つ鯖江高等学校については、現在と過去の学生の姿について、変わった部分と変わらない部分があることを踏まえた展示内容とした。

① 戦時下の学校生活

1941（昭和 16）年には、太平洋戦争が始まり、師範学校の生徒たちも、戦渦に巻き込まれていった。

1943（昭和 18）年度から作業が授業として課され日野川原で大根や甘藷（サツマイモ）などの栽培や草刈り作業に汗を流したり、今立郡服間村（現越前市）で炭焼きを行ったりした。

1944（昭和 19）年 12 月には、勤労働員として、女子部本科 2 年 15 名が大阪市の住友電線社に出動した。

1945（昭和 20）年 1 月 9 日には予科 2、3 年の 73 名が春江の東亜航空会社へ、本科 1 年全員が福井市の国際航空会社へ、1 月 11 日には予科 1 年が西鯖江の南越精機会社へ出動した。大阪へ動員していた生徒は、3 月 10 日に動員解除となり、福井へ帰ったが、大阪は直後の 13 日に大空襲を受けた。

1945（昭和 20）年 4 月には国民学校初等科を除いて学校の授業は停止し、学業は中断された。戦況の悪化によって、生徒たちの学ぶ機会は奪われてしまったのである。



図 20 食堂にて 1941（昭和 16）年



図 21 戦時中の集合写真 1944（昭和 19）年



図 22 体育祭での入場行進 1943（昭和 18）年



図 23 校門前 1943（昭和 18）年

② 官立福井師範学校の誕生

1943（昭和 18）年 3 月 8 日に、「師範教育令中改正ノ件」が公布された。それにより、師範学校は官立（国立）となり、専門学校程度に高められた。修業年限 3 年の本科と、2 年の予科で構成された。予科には国民学校高等科修了者とそれと同等以上の学力ある者、本科には予科修了者、中学校・高等女学校卒業者とそれと同等以上の学力ある者が入学した。また、それまで男女別の師範学校だったのを、男子部と女子部という形にまとめることとなった。さらに、教科用図書も初めて国定となった。

このような背景を踏まえ、昭和 18 年 4 月 1 日に、官立福井師範学校が誕生した。鯖江女子師範学校は男子が通う福井県福井師範学校と統合し、福井師範学校女子部となった。授業は従来通り、男子部は福井市豊島中町、女子部は今立郡鯖江町上鯖江の旧校舎で行われた。

③ 終戦を迎えて

1945（昭和 20）年 7 月 19 日の福井空襲により福井市の男子部の校舎が全焼、8 月 15 日に終戦を迎えた。

男子部では、9 月に入ると、復員してきた者を含む本科 3 年が、最寄りの小学校で教育実習を行った。男子部の官立移管後の第 3 回卒業式が 9 月 30 日に鯖江の女子部講堂で挙行され、143 名が送り出された。通常、卒業式は 3 月に行われていたが、昭和 18 年からは戦争の影響により男子部の卒業時期を 9 月に繰り上げていた。

12 月からは、女子部は校舎が全焼した男子部を受け入れ、高等女学校とあわせて三部授業を行った。三部授業は、1947（昭和 22）年 2 月に男子部が鯖江三十六連隊兵舎跡に移るまで続いた。

④ 戦後、新時代の教育

1945（昭和 20）年の終戦によって、日本の教育の理念、制度、内容は大きく変わった。

教育勅語は廃止され、教育基本法が制定された。そして、小学校に加えて中学校が義務教育とされ、男女共学となった。さらに、それまで学んでいた国史や修身がなくなり、新たに社会科が誕生した。生徒たちや先生、師範学校卒業生は、困惑しながらも、新たな教育理念に希望をもったことが推測される。

また、1947（昭和 22）年には福井で初めての女性校長が誕生した。福井県師範学校の卒業生である吉田秀尾訓導（39 歳）が大和田小学校（現東藤島小学校）の校長に就任したのである。吉田校長は、福井地震の災禍などさまざまな困難に見舞われながら、新時代の教育を切り拓いたのであった。

新時代の教育ではどのような教科書が使われたのかがわかるように、「あたらしい憲法のはなし」（複製）ほか、社会科の教科書を中心に、手にとって見られるように展示した。

⑤ 新制大学の誕生

1949（昭和 24）年には、新制福井大学学芸学部が誕生した。福井師範学校は、福井青年師範学校とともに、学芸学部の母体として一つにまとめられた。

学芸学部は、その後、教育学部、教育地域科学部そして再び教育学部と名前を変え、次世代の教員を育成してきた。

今の大学には、師範学校の面影は見られない。しかし、未来に向かって子どもたちを育てるために、教員を目指す学生たちの、学びに向かう姿とより成長しようという思いは、今も変わることなく引き継がれていると考える。

⑥ 鯖江女子師範学校の跡地

鯖江女子師範学校の跡地には、現在、福井県立鯖江高等学校が建っている。

1948（昭和 23）年に鯖江高等女学校と今立農学校が統合し、男女共学の鯖江高等学校が誕生した。現在、敷地内に「鯖江女子師範学校之跡」と書かれた石碑が残っている。（図 24）

学校名や、学ぶ内容、学生生活は変わってしまったものの、学びの場は依然として引き継がれている。



図 24 石碑『鯖江女子師範学校之跡』
（鯖江高等学校）

Ⅲ 省察および現状分析

1 資料の活用

今回、福井大学附属図書館よる掛図資料の寄贈によって、特別展を開催することになった。掛図資料は、1930年代に作られたと推測されるが、現在に至るまで展示等をされることなく、収蔵されていた。

今回の特別展のように、特定の学校を取り上げて特別展としたのは教育博物館としては初の試みであった。掛図資料のような目玉となる「モノ資料」があったことや、福井大学福応会や鯖江高等学校に多くの写真資料や物品が収蔵されていたこと、かつ資料の借用が可能であったことで、展示の構成がしやすくなった。「資料群」がある場合には、特定の学校を取り上げて展示をすることは可能であると考えられる。

また、展示にあたり、福井大学福応会から借用した写真資料をスキャンし、デジタル化した。そこから使用する写真を選抜し、拡大して展示した。当時の写真家が撮影・現像した写真であったため、拡大しても粗くならず、詳細を見ることができた。書籍等にも印刷された画像はあるが、拡大すると粗くなってしまいうため、写真が残っていると、活用がしやすい。

写真資料は、当時の学校における活動、授業内容、教室の風景、教材教具等を知る大きな手がかりである。調査時には文字資料が有効であるが、展示時には、モノ資料、写真資料の方が見学者に大きな印象を与え、わかりやすい。しかし、各学校の写真資料は、創立 100 周年史等の記念誌作成時に収集されると記念誌発行後には散逸しがちである。散逸を考慮し、今後、手に入った写真資料は、現物を保存しながら高解像度の画像としてデジタル化を進めていきたい。

2 ルーツを求めて—来館者の様子から—

今回の特別展開催期間中の来館者数は、約 2,000 名であった。来館者の年齢構成は、成人が 53%、高齢者が 13%と、大人が中心であった（図 25）。子ども連れの家族は、夏季企画展会期中に比べ、少なかった。開催時期が長期休業に重なっていない 10~12 月中旬であったこと、内容が子どもには難しいものであったことが理由と考えられる。一方で、小学生 11% に対し、中高生が 21%と割合が高いのは、校外学習や修学旅行と重なったためである。小学校の校外学習も数校あったが、9月に比べると少ない。家族連れの来館は少なかったが、学校団体での来館によって、多くの児童・生徒が展示を目にする結果となった。

特別展に対する評価は、4.73 であった（図 26）。「満足」が 78%、「やや満足」が 17%という回答であった。チラシの配布やメディアを通しての広報活動によって、興味関心のある方が特別展を目的として来館したため、満足度が高かったと考える。

また、アンケートでは、以下のような感想が書かれていた。

- ・特別展の女学生が元気いっぱい楽しく前向きに勉強や実習に励んでいる様子が印象に残った。女学校卒の祖母が女学校の同窓会に張り切って行っていました。楽しい女学校生活だったようです。(50代・女性)
- ・鯖江は母が通った学校なので興味深かったです。(60代・男性)
- ・特別展「わたし、先生になる！」が印象に残った。母が通っていた、99歳。(50代・男性)

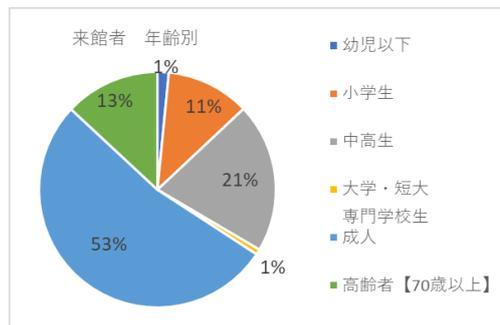


図 25 来館者の年齢構成

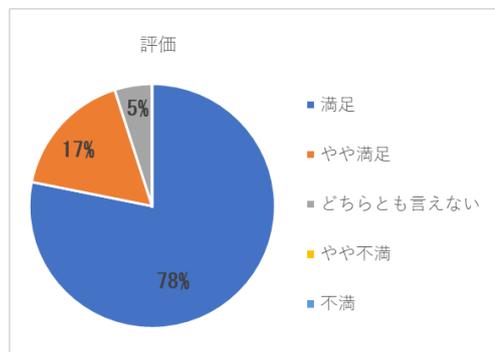


図 26 来館者の評価

・師範学校で学んだ教科が印象に残った。修了まで1～5学年まで課程があり、先生になるまで大変努力されていたこと。
(40代・女性)

・鯖江女子師範の見取り図。自分が住んでいた部屋や食堂などを見て大変なつかしかった。(90代・女性)

アンケートでの記述だけでなく、展示の解説をした際、「現在施設に入所している母が卒業生であるため、何か思い出せるようなものを撮影して帰りたい」、「亡くなった母が卒業生だった」、「自身が鯖江市の出身であるから興味をもった」、と来館のきっかけを語る方もいた。開催初期には、90代後半の鯖江女子師範学校の卒業生が家族とともに来館していた。玄関に設置した校歌検索システムで校歌のメロディーを聴いた上で、校歌を歌いながら見学をしていた。当時を思い起こしながらの見学となったようであった。

このような来館者の声や様子からは、自分自身や家族のルーツを求めて、何かわかることはあるか、ということを探しに来ていることがうかがえた。

対応として、卒業年度を知らなかった場合は同窓会名簿で調べたり、名前が記載されている資料を提示したりした。

鯖江女子師範学校は昭和3～18年に存在し、その後身の官立福井師範学校も、昭和26年に閉校している。

昭和26年の卒業生も、平成初期に退職を迎え、現在90歳である。戦前の師範学校や、旧制中学校に通っていた方の多くが高齢となっている。それに伴い、旧制の学校制度による学校について、証言を得ることはますます困難になる。鯖江女子師範学校に限らず、旧制の学校制度による学校についての展示は、語られる機会が減っていくため、今後も求められる可能性があると推測される。



図 27 展示室内入り口付近



図 28 双六掛図の展示



図 29 展示室内奥より

IV おわりに

鯖江女子師範学校の最後の卒業生たちが教壇を去ってから、30年以上が経つ。鯖江女子師範学校の卒業生とともに教壇に立った現職の教員も少なくなった。「師範学校」という名前自体も、知らない人も多くなった。

この特別展で紹介した鯖江女子師範学校での生徒たちの学びは、数冊の書籍でしか残っておらず、今となってはほとんど語られることはない。記録に残らなかった学校や授業の様子などの「当たり前の日常」の多くは、時代とともに忘れ去られていく。鯖江女子師範学校だけに限らず、学校での学びの記録を、貴重な学校資料と考え、今後も残していきたい。

《引用文献》

- (1) p201 鯖江高校沿革誌委員会 (1989) 『鯖江高校七十五年史』 鯖江高校創立七十五周年 記念事業実行委員会

《参考文献》

- (1) 福井師範学校史編集委員会 (1964) 『福井師範学校史—福井県教育史—』 福井大学学芸学部内福応会
- (2) 福井県鯖江女子師範学校 (1936) 『我が校の郷土教育』
- (3) 福井県鯖江女子師範学校、福井県立鯖江高等女学校 (1937) 『我校の体育』
- (4) 新福祐子 (2000) 『女子師範学校の全容』 家政教育社
- (5) 鯖江高等学校記念誌編集部会 (2014) 『福井県立鯖江高等学校 創立百周年記念誌』 福井県立鯖江高等学校
- (6) ふくい女性の歴史編さん委員会 (1996) 『ふくい女性の歴史』 福井県
- (7) 福井県教育史研究室 (1978) 『福井県教育百年史第一巻通史編 (一)』 福井県教育委員会
- (8) 福井県教育史研究室 (1979) 『福井県教育百年史第二巻通史編 (二)』 福井県教育委員会
- (9) 鯖江高校沿革誌委員会 (1989) 『鯖江高校七十五年史』 鯖江高校創立七十五周年 記念事業実行委員会
- (10) 福井県立鯖江高等学校同窓会 (1967) 『創立五十周年記念刊行 同窓会誌』 鯖江高等学校 山口信嗣
- (11) 福井県鯖江女子師範学校、福井県立鯖江高等女学校 (1941) 『我が校ノ教育』